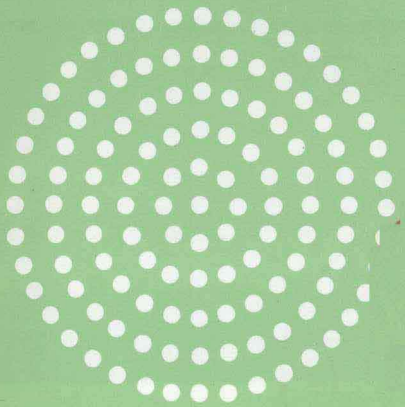
日本の詩集　5

萩原朔太郎詩集



昭和四十三年八月十日　初版発行
昭和四十九年六月三十日　六版発行

著作者　萩原朔太郎
発行者　角川源義
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵東京一九五二〇八　電一〇二
電話東京（二六〇）七二一（大代表）

日本の詩集　5
萩原朔太郎詩集

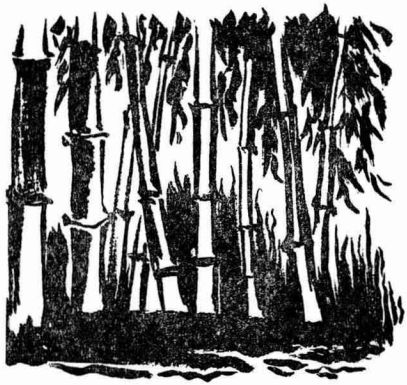
印刷　カラー　暁美術印刷株式会社
本文　旭印刷株式会社
函・扉　暁美術印刷株式会社
製函　川合紙器加工所
製本　株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0392-571905-0946(2)

目

次



詩集　月に吠える

竹とその哀傷

地面の底の病気の顔　一〇
竹　一三
すえたる菊　一四
亀　一五
笛　一六
冬　一七
天上縊死　一八
卵　一九

雲雀料理

感傷の手　二〇
苗　二一
殺人事件　二三
雲雀料理　二四
掌上の種　二五
天景　二六
焦心　二七

悲しい月夜

かなしい遠景　二八
悲しい月夜　二九
死　三〇
蛙の死　三二

くさつた蛤

内部に居る人が畸形な病人に見える理由　三三
春夜　三四
およぐひと　三六
ありあけ　三七
猫　三八
陽春　三九
くさつた蛤　四〇
春の実体　四一
贈物にそへて　四三

さびしい情慾

愛憐　四三
恋を恋する人　四五
五月の貴公子　四七
白い月　四八
肖像　四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さびしい人格　五〇
見知らぬ犬
見しらぬ犬　五三
青樹の梢をあふぎて　五四
蛙よ　五六
山に登る　五八
孤独　五九
田舎を恐る　六〇
長詩二篇
雲雀の巣　六一
笛　六六
詩集　青猫
幻の寝台
薄暮の部屋　七〇
寝台を求む　七三
強い腕に抱かる　七五
群集の中を求めて歩く　七七
その手は菓子である　七九
青猫　八一
月夜　八三
春の感情　八三
野原に寝る　八五
蠅の唱歌　八六
恐ろしく憂鬱なる　八八
憂鬱なる桜
憂鬱なる花見　九〇
夢にみる空家の庭の秘密　九三
黒い風琴　九四
憂鬱の川辺　九六
仏の見たる幻想の世界　九八
鶏　一〇〇
さびしい青猫
みじめな街燈　一〇三
題のない歌　一〇三
艶めかしい墓場　一〇四
くづれる肉体　一〇六
緑色の笛　一〇七
かなしい囚人　一〇八
猫柳　一〇九
鬱憂な風景　一一〇
野鼠　一一一

さびしい来歴　一二
閑雅な食慾
怠惰の暦　一二三
閑雅な食慾　一二四
最も原始的な情緒　一二五
笛の音のする里へ行かうよ　一二六
意志と無明
蒼ざめた馬　一二七
思想は一つの意匠であるか　一二八
遺伝　一二九
顔　一三一
白い牡鶏　一三三
自然の背後に隠れて居る　一三三
艶めける霊魂
花やかなる情緒　一三五
春宵　一三七
◉◉◉◉◉◉◉◉◉◉
軍隊　一三九
詩集　蝶を夢む
蝶を夢む
蝶を夢む　一三四
腕のある寝台　一三六
その襟足は魚である　一三八
石竹と青猫　一三九
海鳥　一四〇
絶望の逃走　一四一
僕等の親分　一四四
湿槃　一四七
かつて信仰は地上にあつた　一四九
商業　一五一
波止場の畑　一五三
松葉に光る
夜の酒場　一五四
空に光る　一五六
「青猫」以後
桃李の道　一五八
風船乗りの夢　一六〇
荒寥地方　一六一
仏陀　一六三
ある風景の内殻から　一六四

沿海地方　一六六
猫の死骸　一六八
沼沢地方　一六九
大井町　一七〇
吉原　一七二

定本　青猫

郵便局の窓口で　一七六
時計　一七七

詩集　純情小曲集

愛憐詩篇

夜汽車　一八二
こころ　一八四
女よ　一八五
旅上　一八六
金魚　一八七
静物　一八八
蟻地獄　一八九
利根川のほとり　一九〇
緑蔭　一九一
再会　一九二
花鳥　一九三
初夏の印象　一九四
月光と海月　一九五

郷土望景詩

中学の校庭　一九六
波宜亭　一九七
二子山附近　一九八
小出新道　一九九
新前橋駅　二〇〇
大渡橋　二〇二
広瀬川　二〇四
公園の椅子　二〇五

詩集　氷島

漂泊者の歌　二〇八
遊園地にて　二一〇
乃木坂倶楽部　二一二
帰郷　二一四
珈琲店　酔月　二一六
新年　二一七

晩秋　二八
品川沖観艦式　二九
国定忠治の墓　三三
無用の書物　三三
虚無の鴉　三五
我れの持たざるものは一切なり　三六
監獄裏の林　三七
昨日にまさる恋しさの　三九

散文詩
郵便局　三三
海　三四

拾遺詩篇
純銀の饗　三八
螢狩り　四〇

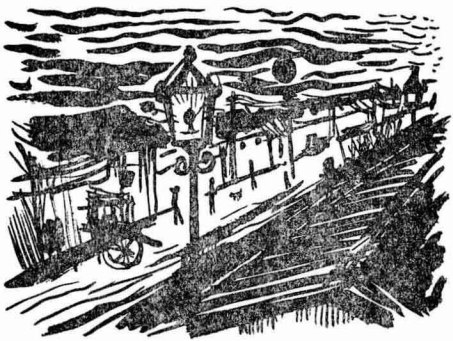
解説
評伝　河上徹太郎　四三
鑑賞　吉田精一　五一
詩の旅　大竹新助　六七
年譜　六九

写真協力　白籏史朗・中村由信・原弘男・前田真三
オリオンプレス・角川書店写真部

萩原朔太郎詩集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩集　月に吠える



地面の底の病気の顔

地面の底に顔があらはれ、
さみしい病人の顔があらはれ。

地面の底のくらやみに、
うらうら草の茎が萠(も)えそめ、
鼠の巣が萠えそめ、
巣にこんがらかつてゐる、
かずしれぬ髪の毛がふるえ出し、
冬至のころの、
さびしい病気の地面から、

ほそい青竹の根が生えそめ、
生えそめ、
それがじつにあはれふかくみえ、
けぶれるごとくに視(み)え、
じつに、じつに、あはれふかげに視え。

地面の底のくらやみに、
さみしい病人の顔があらはれ。

竹

ますぐなるもの地面に生え、
するどき青きもの地面に生え、
凍(こほ)れる冬をつらぬきて、
そのみどり葉光る朝の空路に、
なみだたれ、
なみだをたれ、
いまはや懺悔(ざんげ)をはれる肩の上より、
けぶれる竹の根はひろごり、
するどき青きもの地面に生え。

竹

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地下には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ、
根の先より繊毛(せんまう)が生え、
かすかにけぶる繊毛が生え、
かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まつしぐらに竹が生え、
凍れる節節(せせ)りんりんと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

すえたる菊

その菊は醋(す)え、
その菊はいたみしたたる、
あはれあれ霜つきはじめ、
わがぷらちなの手はしなへ、
するどく指をとがらして、
菊をつまむとねがふより、
その菊をばつむことなかれとて、
かがやく天の一方に、
菊は病み、
饐(す)えたる菊はいたみたる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com